

スピーカー「会話型」時代

声で家電操作、買い物

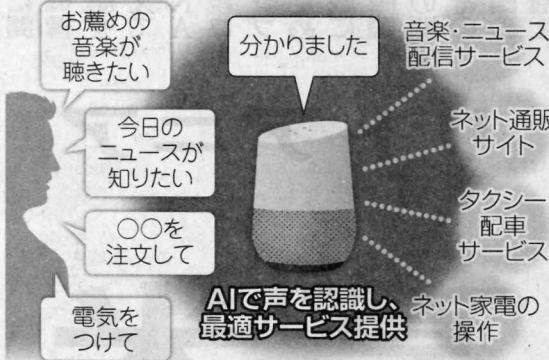
グーグルやLINE 年内発売

米グーグルは17日、会話型のスピーカー「グーグルホーム」を年内に日本で発売すると発表した。人工知能(AI)を活用し、話しかけると、内容を理解して、その日の予定や天気などを音声で教えてくれる。AIを使った音声操作は、将来、日常生活のあらゆる場面に広がるとみられ、日米のIT企業がこうした会話型端末の開発を加速させている。

(小林泰明、ニューヨーク 有光裕)

スマートフォンに話しかけるだけで端末の操作や情報検索などをできるようにするAI「グーグルアシスタント」を、年内に日本語に対応させた上で「グーグルホーム」に搭載する。

AIを使った「話すスピーカー」のイメージ



この商品は米国では2016年に発売され、129ドル(約1万4000円)で販売されている。日本での価格は未定だ。

無料通信アプリのLINEもAIを活用した会話型端末「WAVE(ウェーブ)」を今年の初夏に日本と韓国で発売する。例えば、「音楽を聴きたい」と利用者がスピーカーに話しかけると、利用者の登録情報などから好みを推測し、お薦めの音楽を流してくれるという。

米国では会話型端末が急速に普及している。米調査会社の推計では、インターネット通販大手アマゾン・ドット・コムが14年に発売した「エコー」は、販売台



米国で人気を集めている小型スピーカー「グーグルホーム」(手前)

数が800万台を超える。マイクロソフトも今秋に同様の端末を投入予定だ。

アマゾンが年内にも日本でエコーを発売するとの観測もあり、今後は、国内でLINE、グーグル、アマゾンによる三つどもえの対決が実現しそうだ。

日米のIT企業が競って会話型端末の開発・販売に乗り出すのは、家電やスマホなどを動かす方法が将来、「手動」から「音声」に切り替わると考えているからだ。LINEの出沢剛社長は「スマホのタッチなどを介さない(音声の)入力は多くなる」と話す。

自社の会話型端末が普及すれば、ネット通販の注文やタクシーの予約、ピザの宅配など家庭で生まれる消費者ニーズを自社や提携先のサービスに誘導し、独占できる可能性がある。

情報通信総合研究所の佐藤仁・副主任研究員は「会話型端末を通じて家電などに自由に指示を出せるようになれば、日本でも急速に普及するかもしれない」と指摘する。